

蠹魚の囁

著者	原 富男
雑誌名	漢文學會々報
巻	3
ページ	65-76
発行年	1935-03-15
URL	http://doi.org/10.15068/00146675

蠹魚の嚙

原 富 男

自らの細々とした研究生活に對して反省を繰返へして居る間に、かくあるべしと信じたまゝを書き止め、名づけて蠹魚の嚙といふ。高明の士から見れば、まことに嚙であつて他人の面前などに晒すものではないとお叱りを蒙るでもあらうが、私自身はどこまでも眞面目で正氣である。沱山の石ともなれば幸である。

一

私はこの小記の初に當つて、極めてあたりまへのことではあるが、特に先づ以て我等の支那學研究も亦歴史文化研究の一分野であるといふことをいつておきたいのである。

西洋文明に於ける文化科學の研究（それは畢竟歴史の研究に外ならぬ）は既にその資料の整理も略々つくされて、多くの傑出した人々の勞作或は思索によつて、その歴史の理法、即ち彼等の祖先の生活理法の發見了悟に近かつき得たものではないかと思はれるが、併しそれは何れにもせ

よ、彼等のもつ生活理法に對する或程度の理解は、彼等の勞作の結果たる文化學に關する諸々の著述によつて之を得ることが出来る。併しながら彼等の祖先がもち、現在彼等が發見し、現在及び將來の生活進展の指導原理となし得る所の生活理法は、直ちに、そのまゝ移して以て我等のそれとはなし得られないと思ふ。何となれば歴史は絶對的に特殊性乃至具體性をその成立の根本要素として居るからである。

併しながら現在の我等の生活は、西洋の諸々の文化要素に多大の契機的性質をもたしめて居ることは事實である。この事實を否むときは偏狹な國粹癖たる非を受けても致方がないであらう。故に我等の考へ方が、時に或は、西洋の歴史の上に立つてその後を起すべき立場に在る者の如き觀を呈せしめることがある。私はこのことに對しても、我等の生活の外暈に於ては、その妥當性を認めることに吝か

はない。とはいへ、この妥當性を、我等の生活の中心、やがては生活の全域に亘つて認めようとするならば、それは一種の幻覺であると斷言するに憚らないのである。かゝる幻覺を、動ともよれば、誇氣を以て、その生活の基調としようとすることは、歴史を輕視する結果、現實の感覺的乃至知覺的要素を不當に重視することから起る、文化の表面的絢爛に幻惑された結果、自我に沈潜することを怠つて居ることから起るのである。感覺的知覺的諸要素を重視するといへば、一見一層現實的乃至實際的、即ち具體的の如くであるが、歴史を輕視すること、即ち自己の存在に就いての内省を缺くことは、知覺的なことより以上に大地から足を離すことであつて、一層非實際的である。逆に、現實的な我的存在の認識に關して甚だ缺ける所があるといはねばならぬのである。

そこで我等は、直接、我等の祖先の生活、即ち我等自身の歴史を究めようとすることに、より一層の直接さ力強さを覺える。このことは、更にその源流、少くとも、我等自身の歴史を培つた所の文化にまで遡らうとする強く且必然的な希求を生み出し、且之を必然缺くべからざること、

する。之は歴史の本質上、否、我的存在の本質上から必然的に要請されることである。ここに、私は支那學研究、特に古代文化研究の意味と價值とを置かうと思ふのである。

二

さてこゝで歴史の研究であるが、歴史は既述の如く、我等の祖先の生活の跡で、やがて我等自らの生活の跡にまで連がる。而して我等の現實の生活の反省資料である。現在我等に反省の強い理性的衝動があることは事實である。この衝動は我等がその生活に忠實ならむとし、より一層道德的なならむとし、換言すれば、修身齊家治國平天下の希求が旺んになればなるに従つて、その強さを増大するものである。而してこの衝動は、現實に於て、より一層明瞭にして確實、直接にして力強き生活の指導原理を得ようとする切實なる希求に外ならぬ。この希求を満さんがための一方法として、我等は、沱山の石の譬の如き意味、或は辨證法の意味に於て、西洋の文化科學に熱心に眼をさらすことも望ましいこと、こそ思へ、非難する者ではないが、併しそれは結局他山の石であつて、我等にとつて直接的ではない。

こゝに於て、我等はこの本格的直接的の方法として、その本流に於て、我等自身の生活にまで連る所の我等の祖先が遺した資料に就いて検討しようとするのである。この方法は、我等の過去に於ては如何に生活が進展したか、即ち如何なる生活理法が活いて居たかを見ようとするのである。

換言すれば、如何なる條件の下に如何なる生活が進展したか、及びその進展は又如何なる條件として次の進展を惹起したか、その進展の過程に於てその生活價値の系列は何であつたか等を再現乃至再認識しようとするものである。

私は歴史研究はかゝる方法の實踐としてなされるものであると考へるのである。かく考へるときに、その研究の方法に對して、一定の要求があるべきことは言を待たぬ。

我等は現在所謂支那學に従事して居るものである。我等が一口に漢學のともがらといふ人々は、恐らく誰もが一種の慨世的熱情をもつて居ることを自餘の界隈の人々と共に認めることができる。而してその熱情の因つて來る所以が、或は時に文化意識の顛倒乃至錯倒、或は文化史に對する全くの無理解から、無意識の裡に甚だしい時代錯誤を犯して居ることに在るといふ哀れにも慘めな姿を我等のともがら

なる所謂漢學者の上に見ることがある。我等はこの哀れにも慘めなる姿に眼を覆うてはならぬ。我等はこの哀れにも慘めなる姿を同情ある輓歌を奏でて送ると共に、生々として現實的具體的なる、換言すれば、自覺的な漢文化研究者の颯爽たる姿を作り上げねばならぬのである。

さて、例へば、等しく支那に發生したものではあるが、支那に於て發展した儒教と我が國に渡來し發展した儒教とは自ら別個のものである。されば、我等が文化史の何たるかを理解し、我の現實的意味と價値とを自覺して要請されたる本務として従事して居る支那學は、實に我が國の儒教——一般的にいへば漢文文化——をその結局の對象とする段階或は手續である。この意味に於て、私は、既に支那學に造詣深き多數高名な人士によつて、漢文文化をも含攝せる新國學の樹立が提唱せられんことを久しき以前から豫期して居るのである。私の如き在るか無きかの微細なる存在が、如何に努力しても何の効果も擧げ得ないのであるが、この事は私が常に考へ、及ばずながら私かに意圖して居るところである。

今再び特に儒教を擧げていふならば、我等が我が國の儒

教を一層明確に理解し、現在及び將來に亘つて一層價值多からしめんがためには、支那に於ける過去の文化内容としての支那儒教の内容を、そのまゝ採つて以て無批判乃至超批判的に信奉するよりは、何等の成心なく純粹に、文化史觀照の態度を嚴持して、再びこゝに、支那儒教を見なほさうとすることの方が一層合理的であり、一層歴史的即ち實踐的であり、且有効有價值的であると思ふ。支那に發生し、支那に於て發展した儒教の源流は、恐らくは、劉漢確立に到るまでは、單に所謂先秦諸子の一家に過ぎなかつたであらう。（この事に關してはなほ未だ不完全の論證ながら拙作諸子學總論——先秦思想文化史研究序説——中に於て記述してあるから參看してくれ、ば幸である）。そこで、我等がなさねばならぬのは、その原始を見極め、かゝるものが、如何なる社會的動因の下に如何なる民族個有の論理と如何なる個性的乃至人格的動因によつて、即ち、如何なる文化史的條件の下に、如何にして、あの偉大なる所謂儒教を形成展開するに至つたかを了解することである。こゝに重點を置いてこそ、我等の研究は、その意義と價值とを享有し得るのではないかと思ふ。何となれば、一般に、我等が現

代に生きながら、尙且、過去に關心する所以は、一に歴史に於ける實踐的論理を見出し、それを假りて以て現在に善處し、且、將來をトせんとするに至ること上述の如くであり、而して過去の文化内容は、この歴史に於ける實踐的論理を理解する上に價值あり、必要缺くべからざるものでこそあれ、それ自身では、將來は勿論、現在に於ても殆んどその價值を享有し得ないであらうと考へられるからである。

三

上述の如き基礎的態度の上に立つて、私は次に要求される研究方法を對象としようとするのであるが、今日行はれて居る支那學研究の方法としては、

（一）論理的推理或は適用

（二）遺されたる史料の忠實なる検討解釋推理或は推測の二方法があると考へることが可能である。或は更に多數の方法があるといふ者があるかも知れないが、結局この二つに分類歸屬せしめることができるかと考へるのである。

以下に、この二方法に關して些か實際に就いて考へ、次に、私の要求され最も妥當なものと考へる方法を提唱——

既に多くの人々によつて實踐されて居ることであらうから提唱なる語は或は僭越かも知れないとも考へられる——して見たいと思ふ。

(一)論理的推理或は適用による方法の最も *Attractive* に見えたもの従つて近い過去から現在に於てその使用者の相當多くあるものは、ヘーゲル一派の唱道する歴史主義に教へられて、その辨證法 *Dialectik* をそのまゝ過去へ適用しようとするものである。この最も格好な實例は郭沫若氏の「中國古代社會研究」である。この方法は或程度まで、歴史事象の説明をまなし得るが、併し我等のもつ希求を満足せしめることはできない。何となれば、この方法は飽くまでも既成原理に據る説明であつて、何等新しいものを我等にまゝで齎らさない。換言すれば、過去に於て如何なる生活理法が存在し活いて居たか、又それが如何にして現在の我等を在らしめ、而して更に將來我等は如何に在るべきかに就いて唯一の指針となるであらう所の諸條件は、その源流に於て如何なるものであつたかを我等の忘却（未開拓の史料の處女地に埋れて居る）から呼び起してくれるものではない。加之この方法は動ゝもすれば歴史事實を歪める處を多分に

もつて居る。例へばヘーゲルがその論理に従つて獨乙國民史を書いたといふが、ついに事實を歪めざるを得なくなつたといふが如きがそれである。この方法は一見甚だ學問的の如くではあるが、實は無益の操作である。何となれば、我等の求めて居る所のは未検討の史料の裡から、新しいものを見出すことであつて、既に過去の歴史事實に例外なく適用し得る理法をもち合せて居るならば、今更歴史研究をする必要はないのである。さればこの方法は逆に既成原理の確實性、妥當性を裏書きするといふだけの効果があらばあるといふだけのもので、辨證法自體には或は役立つ勞作であるかも知れないが、歴史研究の方法として採用することにそれはそれ自身許すべからざる撞著をもつて居るのである。之を酷評すれば街學者流の學問的遊戲か、或は何等か爲にする政策的の仕事である。例へば郭沫若氏の「古代社會研究」の如きは、明かにエンゲルスの論理を歴史事實に強ひて *Adapt* して、その論理が歴史事實の上でその眞實性が實證されたかの如くカモフラージュして、自己の抱懷する共產主義的思想の妥當性を宣傳しようとする意圖の歴々たるものがあるのである。

假令一步を譲つて、この方法が一般に歴史研究に適用され、効果があつたものであるとするも、それは結局、この論理を發見した人の國史に於てこそ唯一絶對の權威を享有し得るかも知れないが、歴史の特殊性は同時にその研究に對しても自らその特殊性を要求し來ることは自明のことである。東洋の歴史文化研究の方法と西洋のそれとに自ら差異あるべきことは、今更私の喁々を要するまでもないであらう。この意味に於ても西洋の歴史に行はれた理法乃至その研究方法をそのままに我等の支那學研究に適用しようとするこの方法の誤つて居ることは自ら明かである。

次に上述の方法とは一見全く相反するが如き外見を具へて居るが、同様以上にはその性質上その効果を擧げ得ない方法がある。而して不幸にして之を使用する今日の所謂漢文學者は驚くべき多數に上つて居るのである。

この方法に就いて述べる前に一言しておきたいことがある。それは文化史研究と教育方法とは、截然と區別しなければならぬといふことである。當面の教育的乃至は政策的必要から古典中の一部を採集し來つて、その主張しようとする意圖の裏附をしようとすることは、少くとも歴史文化

研究が事前には結果を豫想し得ず、又その性質上から豫想してはならぬものとは斷然區別してかゝらねばならぬ。

こゝに述べようとする方法は教育方法に屬するものとしては或程度までその意味と價值とを享有し得ると考へられる。即ちこの方法は有意義的なると無意志的なるとに係らず（恐らくは多くの人の場合無意志的、いはゞ不知不識の間に於てであらう）とにかく現實經驗（勿論知識をも含む）から得て、しかも固く信じて疑はざる所の「成心」を大切に胸奥深く秘め藏しておいて、之をいとも氣儘なる歴史事實の記錄の涉漁によつて、一見尤もらしい論證の形式あるものに作り上げ、それを恰も過去の時代に於て實存し活いて居た生活理法或は文化内容であつたかの如く誤信し吹聴しようとするものである。かく解剖し説明すれば、この方法の非なることはいはずして明かである。この方法は時に甚だ貴重なる材料をも見落す惧がある上に動ともすれば、その抱持する成心を妥當化する爲に不都合なる材料は、それが如何に嚴然たる歴史的事實であるにしても、眼を覆うて埋没に委するか、勇敢なる人は何等かの理由を設けて歴史事實たることを否定するか、更に疑はしい史料に對しては

その都合によつて異常なる想像力を逞うして不可能なる解釋をも敢て成立せしむるといふが如き理不盡を敢てする嫌がある。然るに現在行はれて居るものに、この種の研究の意外に多いことは、學徒として誠に遺憾の極である。この方法は些か酷評に過ぎるかも知れないが、上述の方法の不可なるは之を知つて居るが、史料の忠實なる検討に徹底しようとする眞剣さに於て缺けて居て、もし有意志的ならば不本意ながらカモフラージュを用つて一時を糊塗し苟安を貪らうとするものである。現今我が國に於て國民道德の研究として銘を打つて發表されて居るもの、中の或ものが、動もすればその研究の意圖に反して積極的に國民道德なるものに對して疑惑を抱かしむる結果を醸成して居る原因の一は、たしかにこの研究方法をとつて居ることに在ると考へられるのである。

更にこゝに、甚しく獨斷的にして空疏なる清談に墮して居るものがある。現在その數は餘り多くもないやうではあるが、動もすれば甚だ頑固にして濟度し難い漢學者がある。而して反動的に相當の信者をもつて居る向もあるのである。この方法は、よくいへば所謂貫通を主とする、材

料の史料としての價值批評及び整理はともかくも、たゞ過去の文書を讀むことによつて、自己の主義主張に合致した部分、或は氣に入つた部分を強調しようとする。換言すれば、過去の一部の思想を解釋し、その得た所を以てそのまゝ、現實の我等の一般的指導原理乃至は世界觀、人生觀なりと過信或は誤信して之を論議の對象とするものである。所謂宋學がこの適例である。例へば宋儒の嘗て論議の中心であつた所の大極圖說の如きものを、そのまゝ、現在の我等の世界觀として、或はそのまゝ之を採用しようとし、或は之を否認しようとし、或は折衷改修しようとして、甲論乙駁以て能事終れりとするが如きが是である。かゝる方法は歴史文化研究の方法として不可であるばかりでなく、之を原理想索の方法とするも殆どその價值は認められないのである。何となれば既に史的研究ではなく、且我等は現在に於てかゝる史的研究ならざる原理論に於ては既に世界人類中の賢哲が貽したる原理自體の記錄の上に、所謂思想展開の尖端に立つて居るからである。我等に必要なは、この尖端に立つて居る我等、即ち將來に向つての仲展のモメントとしての私の指導原理を創造する方法として唯一つ許され

て居る所の反省或は思ひかへし見なほすといふ事行によつて過去の裡に活いた我等に直接的にして具體的なる生活の理法、歴史の論理の發見了悟である。故にこの方法は無意味である。加之時代錯誤を敢て冒さうとするものである。併しながらこの方法の中樞作業たる貫通の重要な價值をもつて居ることは言を待たぬ。故にその態度の非がこの價值をも蔽つてしまつて居るのである。莊子天運篇の中に「夫水行莫如用舟、而陸行莫如用車、以舟之可行於水也、而求推之於陸、則沒世不行尋常、古今非水陸與、周魯非舟車與、今剗行周於魯、是猶推舟於陸也、勞而無功、身必有殃、」とあり、又荀子不苟篇中に「故千人萬人之情、一人之情是也、天地始者今日是也、百王之通後王是也、君子審後王之道、而論於百王之前、若端拜而議、推禮義之統、分是非之分、總天下之要、治海內之衆、若使一人、故操彌約而事彌大、五寸之矩、盡天下之方也、故君子不下堂、而海內之情舉、積此者則操術然也、」又非相篇中に「夫妄人曰、古今異情、其以治亂者異道、而衆人惑焉、彼衆人者、愚而無說、陋而無度者也、其所見焉、猶可欺也、而況於千世之傳也、妄人者、門庭之間猶可誣欺也、而況於千世之上乎、聖人何以不

欺、曰、聖人者、以己度者也、故以人度人、以情度情、以類度類、以說度功、以道觀盡、古今一度也、類不悖、雖久同、理、故鄉乎邪曲而不迷、觀乎雜物而不惑、以此度也」とある。これ等は周制の當時に於ける適不適を云爲して居る相反對する記録であるが、我等はこの何れにもそのまゝには加擔し得ないのである。このことの事理が了解せられるならば、この方法が我等の支那學研究方法圈内から驅逐せらるべく、又しなければならぬ理由を理解することができると思ふ。こゝに注意すべきことは上述中に「宋學」といつて居ることであるが、こゝにいふ宋學の意味は宋代を對象とする文化史研究といふ意味とは自ら別個のものである。明瞭に區別しておくべきである。

以上は私の探るを欲しない方法の大概を擧げ説明し、批評を加へたものである。以下に私の提唱しようとし、既に高明なる士によつて實踐されて居る方法を了解して見たいと思ふ。

(一)遺された史料の忠實なる檢討解釋推理或は推測に據る方法を考へる前に、一通り明治時代から近い過去に至るまでの漢學研究へ一般に支那の古典研究を意味し、宋學と

對立關係に置かれた漢學といふのではない)の傾向が如何なるものであつたかを概見することが必要である。

明治以後、我が國人の支那學研究の態度乃至は方法に就いては、大別して之を二つにすることが出来る。兩者とも徳川時代以後培成された傳統に慊らずして起つたことは共通の事實であるが、この傳統に先づ初に覺醒的改革を加へて起つたものが、即ち西洋の哲學乃至哲學史の研究方法を以て、支那の古典を解釋し、整理しようとするものである。

之に對して、その文化の個性的方面を強調し、各文化は各その獨自性に據つて研究しなければならぬとして起つたのが即ち支那人となりきつて純粹に支那人の方法を以てし、一切西洋學の方法を排斥しようとするものである。前者は上述(一)の研究法に屬せしめらるべく、この不可なるは既述する所で明かである。後者はその性質上、清朝の着實な考勘考證訓詁の學を経て、魏晉六朝の學から漢學に遡つてその探索の勞作を要求するものである。併しながら、日本人である我等に、支那人になることは到底不可能であるが故に、我等にこの方法に徹底できないことはいふまでもない。而して、この方法によつて我等の學を立てるべきでもない。

ぐ、又立てることもできない。何となれば、我等は日本人であるからである。この二つはかく兩極端に立つては居るが、等しく我が國人在來の支那學研究方法を改革しようとするものである。前者に於て貫通を主として居る部分は採るべく、後者に於ては文獻の檢討吟味に急なるを以て貫通を顧るに遑がなく、又それに甘んじて居る傾が多分にある。私の次に述べようとする方法は、私の現實的存在の自覺の上に、いはゞ前者と後者とを *aufheben* して第三の立場に立たうとするものである。私がこゝに特に *aufheben* といふ語を用ひる所以は、私の採らうとする方法が、決して兩者の妥協折衷ではないといふことを明かにしておきたいからである。二つの相對立するものを加へて二で割るといふ程のものならば、妥協折衷といふべく、之は兩者共できるならば十全に包攝保存し、これ等を生かし活かせ、且その兩者の何れにも屬しないといふ立場に立つといふ風なものであつて、こゝに第三方法の特徴、即ち必然性があり、現在に生きる我が國人、東西文化の所有要素が錯綜して居る我が國文化史の途上に在る我等、西洋人でもなく支那人でもなく日本帝國の臣民たる我等、徳川時代の臣民でもなく明治時

代の臣民でもなく、現代の臣民たる我等の研究たるの本質を具有することができるとはなからうか。こゝに餘人はいざ知らず、我等によつて要求され、我等の手に依つて研究される研究對象としての支那學は、その本來の姿を示顯せしめられるであらうと考へるのである。かゝる方法的自覺があれば、現今とかく文化人視野の中心から遠けられようとする所謂漢文化は、やがて之を中心に戻すことができると思ふのである。方法的自覺のない所に於ては文化科學に従事する意味はないと信じて誤りはないであらう。

さてかゝる意味に於て私の所謂第三方法は如何なるものであることを要請されるか。この方法はその性質上、先づ次の二條の勞作を先行せしむるに非ざれば不可能である。

第一、自然科學的方法による材料の整理檢討 上述西洋の方法援用に對立して起つた方法が之に適用される。

この作業は、現在に於ては我等には全く不可能なる部分存して居る。故に我等は之に「可能的範圍に於て」といふ制約を附することの止むを得ざることを知る。幸なことに、この作業に關して清朝人の三百年間に亘るいとも優れた成績による絶大なる助力を得ること

ができる。たゞ彼等の成し上げて居る所は甚だ散漫である。故に我等は之を科學的に整理し、足らざるを補つて、以てその目的に役立てることに努力すべきである。この作業には地理學、天文學、氣象學、植物學等、殊に考古學の協力を必要とする。故に我等は歴史支那に關する自然科學者の *Handbook* に對して新に注意を喚起しなければならぬ。例へば先年、小川琢治博士によつて提唱された歴史地理學の如き、又同氏の山海經穆天子傳等に關する研究の如き、新城新藏博士の曆の研究の如きは最近に於ける最も著しい關心的事項である。要するに支那人のこの作業に關する成績をできるだけ利用し、更に自然科學的眼光を鋭くし、眼界を廣くして一層精密に、一層客觀的に史料の檢討に従事することが第一の先行條件である。

第二、第一によつて得られた材料は、飽くまで客觀的に換言すれば、できるだけ虚心平氣にその内容を檢討すべきこと、文献であるならば、その成立に關して一單位とし、しかも有機體に於ける一細胞の如く、研究對象として規定せられた時代の全機構の一組織として、

その内容を通觀熟讀し、望文生義を避くべきは勿論のこと、斷じて斷章取義を禁すべきである。かくしてその單位單位の包含する内容と自餘のものとの相關關係に於て把握することが第二の先行條件である。

この二條の作業に従事して居る間は、その結果に關しては豫想を許してはならぬ。動もすれば歪みたるが如き既得の思想内容に據る解釋をできるだけ避けるやうに努力することを要する。要するに第一から進んで第二の内容檢討に従事するに當つては、その歸結として鬼が出るか蛇が出るか我等は虚心平氣に飽くまで冷靜に忍耐強くその結果を待つといふ態度を採るべく、結果をこね上げるといふ態度に出るはならないのである。

さて、かくして得たる單位單位の相關關係に於ける内容を把握した上に立つて之を綜合解釋するときに、我等の所期の目的は達成されるのである。併しながら、この第一第二の勞作は、常に可能的範圍に於てといふ制約を伴ふ。故にこの綜合解釋推理或は推測に關しては、或程度の即ち可能と不可能の極限に於ての飛躍は之を許さざるを得ないのである。否、この止むを得ざる飛躍にこそ研究従事者の人

格乃至は個性 *Essenheit* 乃至は *Persönlichkeit* の顯示があり、こゝに歴史研究がその獨自の意味と價值とを以て成立するのである。この飛躍は更に之を説明すれば、歴史研究に於ては不可避の事實である。一般に文化科學は止むに止まれぬ自己反省、そして自らの本體を擲かうとする生命自體の働きであるに係らず、そこには常に不可能を敢へて成し遂げようとする矛盾を伴ふ。而してこの矛盾は不可避の矛盾であり、この矛盾を超えるには如何にしてもこゝに飛躍を許さざるを得ないのである。而してこの飛躍によつて不可能は可能となるのである。されば、文化科學はこの矛盾を冒し飛躍を許すに非ざれば成立不能である。我等はこの飛躍に名づけて了悟といふ。さとりである。

かく要求し來れば、恐らくはこの方法に對して、それは不可能であると諦め、或は非難する者が多いであらう。併しながら、私は之を可能ならしめる方法が全然ないとは考へない。又考へたくもないのである。例へば或時代を劃し時代的範圍を縮小することによつても可能性を帶はしめることができる。又第一條件に於ても自然科學的客觀性を失はない範圍に於ては、その人々によつて獨特の工夫をする。

ことも許されて然るべきである。とはいへ、結局、學問は止むに止まれぬ希求に基くとはに盡きせぬ行脚である。我等はその歸結の得否に關して云爲して居るときは、何事も爲し得ないのである。私はかく考へるやうになつて初めて「先の見える伶俐な人には學問はできぬ」といふ言葉の眞味を味ふことができたやうな氣がして居る。我等は七分の二十二の計算をして居ては、まるい桶は何時の日に至るも製作し得ないことを知つて居る。然るに十五年の年期を入れた桶屋の徒弟はよく一滴の水をも泄さぬまるい桶を作り得るのである。或はいふ材料の整理、即ち私のいふ第一條件の一部の作業に對してすら、古人は既に掃葉の歎を發して居る。到底人間の手によつてできる業ではない。歸結を得るまでには永遠に盡きぬ勞作が續けられねばならぬと。併しながら、それは結局なさねばならぬ勞作である。我等は爲さねばならぬ仕事をそのまゝに捨ておくことはできない。いはんや可能的の努力をも盡さず不満足なる基礎の上に立つて、賣名的偽作に浮身をやつすことはできない。爲さざるべからざるが故に爲し能ふのではなからうか。義務なるが故に爲し能ふとはカントがその道德に於て示した意氣で

あり、實踐の信條である。我等は方法的自覺をこそ必要とすれ、賢明なる形式的論理學者乃至は賢くも精密を誇る者が豫め計算したる設計圖の裡に筆を投じて腕を拱き歎息して遂に爲すなく終るが如き者たらむよりも、不才なるが故に十五年の年期を孜孜として精勵する桶屋の徒弟たらむことを志すべきではなからうか。

（本稿は昭和七年六月二十三日午前十時脱了の舊稿である。現在の氣持としつくりしない個處、或は改めたいと思ふ個處もあるが、私の研究生活の一過程として舊稿のまゝ掲載して置くことにする。昭和十年二月十二日）